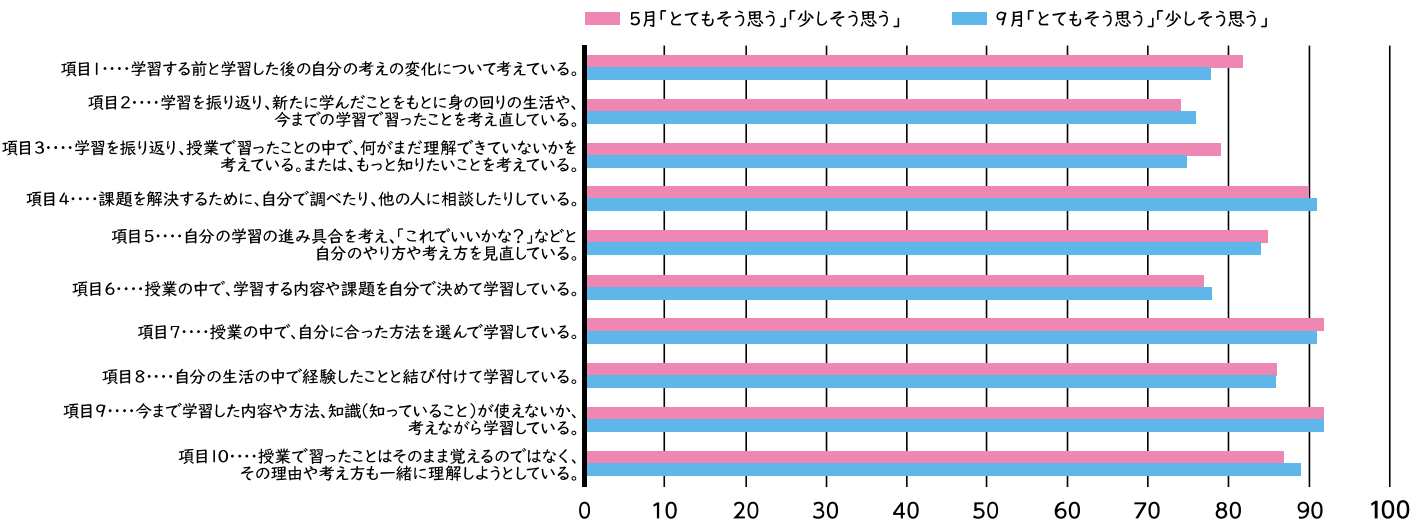


富士見小学校の研究の取組

児童アンケートの結果より



児童アンケート結果では、3つの項目で9割の児童が肯定的に答えました。項目9は、主に「知識が連続する学習サイクル」の中での「問いをもつ」「見通しをもつ・解決方法を考える」といった場面で表れていると考えられます。また、項目4・7は、「取り組む」場面における意識や行動を反映した結果であると考えられます。

一方、教員を対象にしたアンケートでは、約8割の教員が「問いをもつ」「見通しをもつ・解決方法を考える」を単元設計の際に、特に大切にしていることが分かりました。このことから、教師が重要と考えて意識的に指導している場面では、児童の意識も高まりやすいことが伺えます。

また、項目2・項目3・項目6に関しては、肯定的な回答が8割を下回りました。これらの項目は「児童の自己決定の場面」や「振り返りの価値」に関わる内容であり、本校でも課題として議論してきた部分です。これらに関しては、今後の課題として、引き続き検討を進めていきます。

【ご指導いただいた講師の先生方】

大妻女子大学 教授	石井 雅幸 先生
大妻女子大学 教授	澤井 陽介 先生
創価大学教職大学院 教授	渡辺 秀貴 先生

令和6・7年度千代田区教育委員会研究協力校



児童が自ら学び、自ら考える 学習指導の実現

令和7年12月5日(金)

千代田区教育委員会 教育長
堀米 孝尚

千代田区立富士見小学校は、千代田区教育委員会研究協力校として、日々教育実践に取り組まれてきました。小牧来太校長をはじめ、教職員の皆様の研究に対する一途な姿に対し、心から敬意を表します。

さて、令和7年9月に、中央教育審議会より「次期学習指導要領に向けた基本的な考え方」等が論点整理にて示され、その中で「持続可能な形で主体的・対話的で深い学びを通じた資質・能力の育成に資する学習環境のデザイン」等の重要性が述べられました。

本研究で深めてきた「児童の知識が連続する学習サイクル」はまさに次代の教育に求められる学習環境のデザインであり、多様な子どもたちの包摂性を高める上で大変意義深いものであると確信しております。

最後に、この研究発表が教育現場での実践に活かしていただくことを祈念するとともに、本校の研究に、ご指導・ご助言を賜りました講師の先生方、並びにご支援いただきました多くの皆様に御礼を申し上げます。

千代田区立富士見小学校 校長
小牧 来太

本校は、令和6年度・7年度千代田区教育委員会研究協力校として、研究主題「児童が自ら学び、自ら考える学習指導の実現」に向け、研究を進めてまいりました。令和7年度は、国語科、算数科、理科の学習指導を通して、「自ら学び、自ら考える」児童の育成を目指してきました。

この度、研究をまとめ、その成果を発表させていただける機会をいただいたことに、深く感謝申し上げます。

研究リーフレットを御覧の方々には、本校の学習指導や学校全体の取組が参考となり、自校や自治体の教育目標や教育方針の一助となれば幸いです。

結びに、本校の研究に際し、ご指導・ご助言を賜りました大妻女子大学教授石井 雅幸先生、大妻女子大学教授澤井陽介先生、創価大学教職大学院教授渡辺秀貴先生に厚く御礼申し上げます。また、本校の研究を支えていただきました保護者、地域、関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。挨拶といたします。

富士見小学校の研究の取組

1社会的背景

■小学校学習指導要領総則編(平成29年告示)・・・深い理解を伴う知識の習得につなげていくため、以下の2点を重視している。
① 知識を相互に関連付けてより深く理解する ② 知識を他の学習や生活の場面で活用できるようにする
■文部科学省(令和6年中央教育審議会諮問)
・「子供が学びを自己調整し、教材や方法を選択できる学習環境デザイン」の重要性を示している。
・自分の考えを持ち、根拠を持って明確に説明すること、自律的に学ぶ自信がある生徒が少ないことが課題とされている。

2児童の実態

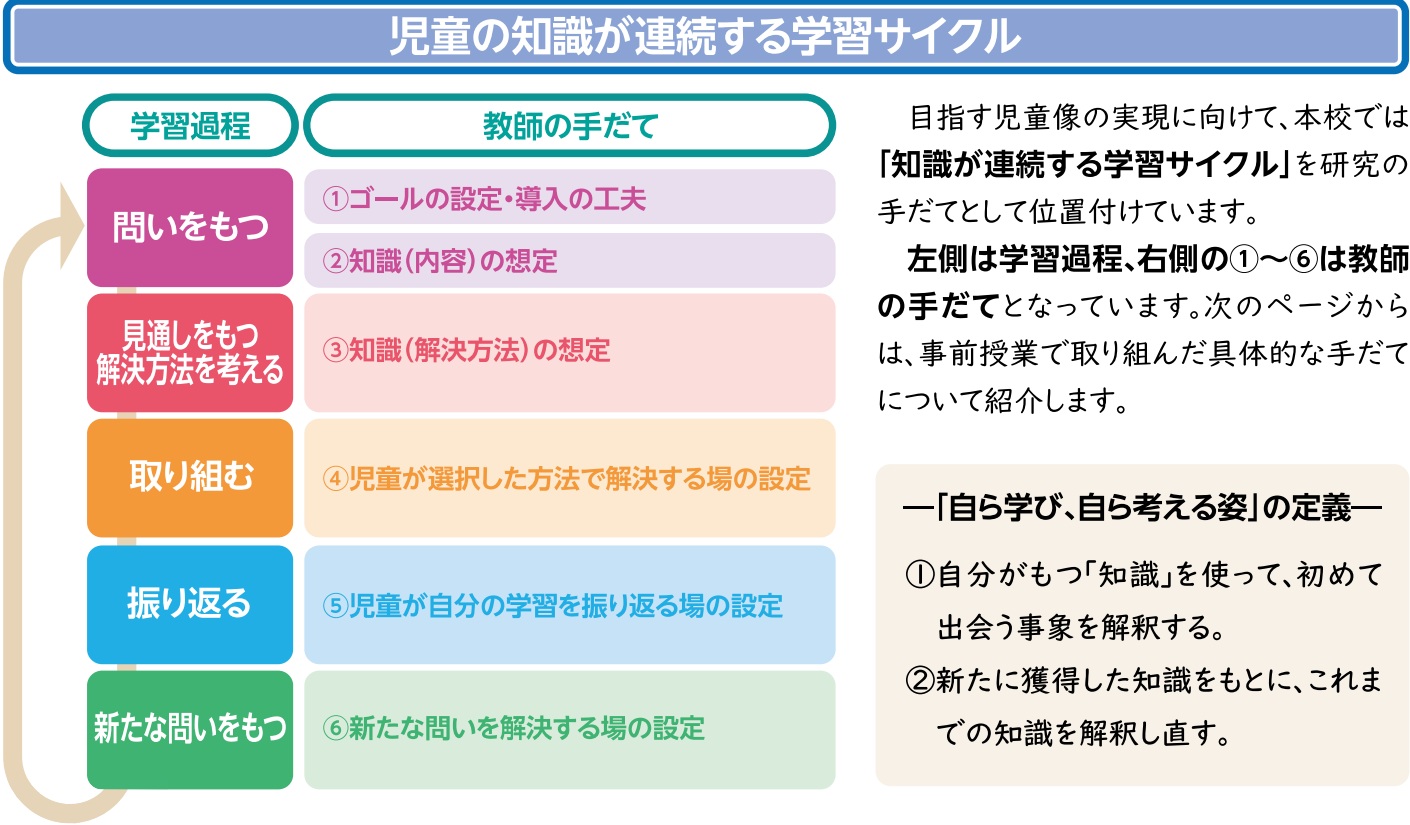
■先行学習により学習前から、豊富な知識をもつ児童が多い。
■一方で、その知識を相互に関連付けて活用し、根拠を明確にして説明することには、課題が見られる。

3研究仮説

教師が、児童のもつ知識を関係付けたり、学習方法を選択させたりする場面を意図的に設定することで、児童は自分の考えに根拠をもって主体的に学習へ取り組むのではないかと。

4研究構想

目指す児童像 自ら学び、自ら考える児童
研究主題(令和6年度～) 児童が自ら学び、自ら考える学習指導の実現



児童の知識を想定するのは本当に大変な作業です。しかし授業の中で「やっぱりそうきた!」「そんな発想があったのか」というやり取りがあり、子どもと学ぶ楽しさを実感しました。また、この学習サイクルは、昨年度の校内研修会でベテランチームが考案したものをもとにしています。研修で「学習の連続性が必要だ」という結論に至り、手だてが形になりました。教師自身も、対話を通じて学びを生み出すことの大切さを改めて実感しました。

共通理解をもって研究を進める取り組み

学校経営方針にもとづいた校内研究

本校は、学校経営方針の基本方針2「自分の思いや考えをもち、進んで学び行動する」にもとづいて研究を進めています。校内研究を通して、「児童が自ら学び、自ら考える」授業への転換を目指しています。

学年で取り組む教科を選択

令和7年度は、研究部会を教科ごとに編成しました。4月当初に各学年で相談し、取り組む教科を決定しました。
今年度は、右の組織体制で研究を進めています。

国語	理科	算数
1年 3年 音楽 養護教諭	4年 5年 6年 栄養教諭	2年 特別支援教育 図画工作 算数

毎週火曜日は、MAPS会

校内研究の時間(MAPS会)を設定しています。研究推進部が年間計画を立て、運営を行っています。令和6年度からは、研究授業の前に教職員へ「授業のすすめポイント」を紹介する時間を設けるなど、MAPS会の内容も随時アップデートしながら取り組みを深めています。

研究便り F・MAPS

研究全体会の後には、研究推進部が「研究便り」を発行しています。講師の先生のお話や協議会での内容をまとめ、記録として残しています。さらに、コラボレーションツールで共有することで、いつでもどこでも振り返ることができます。

ICT活用の工夫

研究全体会ではデジタル・ホワイトボードを使い、各自の気付きを入力して協議に生かしています。また、児童アンケートにはオンライン・アンケートフォームを用い、数値と記述の両面から成果と課題を整理しています。これらにより結果をすぐ共有でき、協議に時間をかけられるようになりました。

自己申告の授業観察

自己申告の授業観察では、研究推進部が提案した指導案をもとに略案を作成し、授業を実施します。授業を公開し合い、互いに学び合い・高め合うことをねらいとしています。自分で挑戦したい授業に取り組むことで、得意なことや課題を生かした実践が集まり、励まし合う雰囲気づくりにつながっています。

部会・研推での振り返り

研究授業の後には、部会や研究推進部で振り返りを行い、授業で見られたよい手だてや課題を蓄積してきました。その結果、児童の学びを深めるための共通の手だてが見えてきて、学習サイクルが定着しつつあります。今回のリーフレットも、これまでに見られた、こうした成果をもとにまとめています。

夏休みでも校内研究

令和5年度から夏季研修を取り入れ、研究に対する教職員の共通理解を深める時間を設けています。「児童の知識が連続する学習サイクル」は、令和6年度の夏季研修での話し合いから生まれたもので、ベテランチームの提案をもとに作られました。教職員の声を生かしたボトムアップ型の校内研究を大切にしています。

どの学校でも校内研究がありますが、研究主題は十人十色です。同じ主題でも内容が全く違うこともあり、混乱することもあります。ここでは、研究推進部に3年間所属したM田が、校内研究に前向きになれるマインドをお届けします!

「研究主題がよく分からない!」「研究って何をすればよい!?!」——先生方がよく悩むことではないでしょうか。大切なのは、教師も児童も同じく「Try & Error!」の心構えです。私自身も異動1年目は「研究主題が難しい…。」、2年目は「研究授業者になった…。心配だ…。」、3年目には「主題がこんがらがってきた!」と迷走しました。
しかし、いつも「まずはやってみよう!」の気持ちで臨んだことで、少しずつ主題も理解でき、研究発表の日を迎えることができました。失敗や分からないこともありました。が、「やってみた」からこそ収穫は多かったです。考え込んで動けなくなるよりも、「Try & Error!」こそが近道なのではないでしょうか。

富士見小学校の研究の取組

児童の知識が連続する学習サイクル(実践例～事前授業より～)

学習過程

問いをもつ

教師の手だて

①ゴールの設定・導入の工夫

児童に「手が届きそうで届かない」レベルの問いを設定することで、「やってみよう!できるかも!」という気持ちを引き出せるようにしました。

2年 算数科「さんかくやしかくのかたちをしらべよう」

児童が「自分だけの図形図鑑を作りたい!」と思えるように、**学習のゴールを「図形図鑑を完成させる」ことと設定しました。**



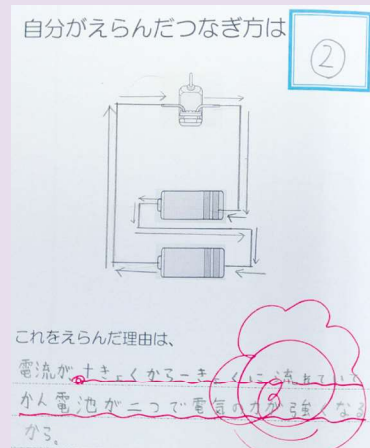
2年

②知識の想定(内容)

「育てたい力」を明確にし、学習前に児童がどのような知識をもち、思考するのかをあらかじめ想定しました。

4年 理科「電流のはたらき」

既習事項の「電気は回路になると通る」という知識や、懐中電灯やリモコンの乾電池の並び方といった生活経験を想定しました。これらをもとに、児童は根拠のある予想や仮説を立てることができました。



4年

見通しをもつ 解決方法を考える

③知識の想定(解決方法)

児童が事前にもっている解決方法を想定し、必要に応じて教師が方法を示したり引き出したりすることで、「できそう!」という見通しをもつことができるようにし、よりよい解決につなげました。

5年 理科「発芽と成長」

問題・仮説・実験方法を考える際には「視点」を提示することに加え、既習事項を想起させる「教師の問い掛け」や方法の比較を促す働き掛けを行うことで、児童の考えを学級全体に広げることが効果的です。



5年

学習過程

取り組む

教師の手だて

④児童が選択した方法で解決する場の設定

自分なりの解決方法を発想し、粘り強く試行錯誤できる場を設定しました。教師は**十分な時間を確保し**、児童自らが考えて行動できるように支援しました。

1年 国語科「やくそく」

聞き手に伝わりやすい音読の仕方のポイントを考え、児童と教師で「よい音読の仕方」を作成しました。各場面を読み取るごとに内容をバージョンアップしていきました。



1年

特別支援学級 算数科「どちらがながい」

自分たちで作った輪飾りの長さを比べる方法について考えました。「まっすぐにする」「端をそろえる」というキーワードを手がかりに、試行錯誤しながら取り組みました。



特別支援学級

振り返る

⑤児童が自分の学習を振り返る場の設定

①**学びの連続**につながる「新たな疑問をもつ」②**自己調整**につながる「自分の学習を見直す」③**学びの自覚化**につながる「学習前後の変化を捉える」という3つの視点を取り入れました。

3年 国語科「仕事のくふう、見つけたよ」

児童が学習の意義を実感し、新たな課題への意欲を高められるように振り返りの視点を工夫しました。

- ・学習を通してできるようになったこと、自信がついたこと
- ・学習する前と後を比べて変わったこと
- ・新しい発見があったこと、もっと考えてみたいこと、やってみてみたいこと

私は、この学習をしてダンスに関することがもっと知れたと思うし、他の人の文を読んで『なりたいたい』と思う仕事が増えました。それにみんなすごく詳しく書いていたからすごいと思いました。もっとダンスに関することを知りたいし、色々なことをやってみてみたいと思いました。

実際の児童の振り返り

新たな問いをもつ

⑥新たな問いを解決する場の設定

振り返りで出た新たな疑問を解決する時間を設定しました。これにより、**学びの連続性と学習の必然性**が生まれ、学習意欲を保ったまま次のサイクルにつなげています。

6年 理科「物の燃え方と空気」

実際に児童は、次のような問題を自ら設定して追究しました。

- (例)・ろうそくの長さを変えると、酸素と二酸化炭素の割合は変化するのか。
・空気穴の位置によって、ろうそくが燃える時間は変わるのか。



6年



教師が「知識が連続する学習サイクル」を意識した授業づくりや手だてを設定することで、児童の学習に向かう姿勢が変わってきました。学習を自分事として捉えるようになってきます。「教えてもらえる。」を当てにするのではなく、自分で解決したい!という意欲も見られます。また、「塾で習ったから、こうなるに決まっている。」「答えさえ求められたい。」ではなく、自分が既にもっている知識や経験を結び付けて「自分の考え」として説明できる児童が増えました。